

九月一日午後十時二十分

老人はかっちりとしたキングス・イングリッシェを喋った。かすかな雑音と、一拍の間を置いて受話器から流れ出る声は、リヴァプールの訛りがニューヨークの歯切れの良いアメリカン・イングリッシェに吸収された名残りだった。

老人の英語は旧制高校と帝国大学で培われたものだ。

「おはようございます、サー」

ニューヨークに住む高名なミュージシャンは、自分が帰依した宗教の、生ける最高指導者と直接言葉をかわしていることにひどく緊張する余り、時差のことを忘れていたようだった。彼は自国の女王陛下の前に出、勲章を授かったこともあった。しかし、その時は一人ではなかった。共にデビューした、三人のバンドの仲間と並んで跪いたのだ。

すでにグループはばらばらになり、音楽活動を続けていない者もいる。

「曲ができたそうですが——」

老人はいった。

「はい。歌詞は私が作りました。英語なので、日本語訳をしていただく必要があります」

「作詞家はこちらで捜してあります、先に曲を聞かせて欲しいのですが……」

「はい、サー」

ミュージシャンはプレズビダ（長老）という単語を老人に対して使わなかった。もし、老人がサーを好まなければ、マスター（師）と呼んだらう。

しかし老人は寛大で、細かな敬称については気を遣う様子はなかった。

「少し待って下さい」

老人はというと、受話器を置き、部屋の扉に鍵をおろしに立った。数日前から老人は自分の体調が崩れ始めているのを感じていた。

忙しさの余り夏風邪をきちんと治しておかなかったのがたたったようだ。

老人のいる部屋は彼の他には誰一人いなかった。いや、この部屋のある巨大な建造物にはこの日のこの時間、誰一人いない筈なのだ。

この建物は、二年の歳月と信徒二百七十万人の期待と信仰心に支えられて完成するのだ。落成式は、なるべく多く信徒の参加を得ておこなわれなければならない。

二週間後にその日は迫っている。

暗く広大な建物の中に、老人がいるのは、その落成式にむけてただひとつだけやり残された仕事を終えるためだった。

自然と宇宙の意思を信仰する、巨大宗教団体の最高位、長老の座にある彼は、己の肉体が死を迎えるまで、その聖職を解かれることがない。

それゆえに、彼はしておかねばならなかった。ニューヨークに住む、彼以上に高名で、彼と同じぐらい敬虔な信者であるこの音楽家と、たった二人で話すことが、そのしておかねばならぬことの仕上げだった。

老人は喘ぎながら、電話機のある場所に戻った。

「お待ちせしましたな。そちらには何方どなたもおられんかな」

「私人です、サー。今からお聞かせする曲も、自宅のスタジオで録音したもので、テープは、これから再生するオリジナル一本だけです」

「楽譜は？」

老人は訊ねた。

「事務局の方にお送りした一通をのぞき、すべて焼却しました。サーのおっしゃる通り」

「大変な御苦労をありがとうございました」

「いえ……」

二人の男はしばらく沈黙した。

「それではかけます」

ニューヨークのミュージシャンはいった。

老人は、建物の奥に組みこまれた複雑な装置からのびる、ピックアップが受話器にしっかりと付いているのを確認した。

電気と電話だけは、完成目前のこの建物の中で生きているのだった。

前日に、秘密裡に会った技術者から教えられた通りに、老人は機械をセットしていた。操作は実に簡単だった。しかし、老人にその機械の仕組みを理解するのは、到底不可能なことだ。

プログラムは、コンピューターを買った会社の技術者が製作したのだ。

技術者が信者ではなく、彼の親族にも信者が一人もないことを確認して、老人はプログラミングを任せたのだった。

コンピューターの本体は驚くほど小さなものだった。技術者から見せられたそれは、煙草の箱ほどの大きさしかなかった。

老人は今、そこにある唯一のスイッチを作動させようとしていた。

プログラマーから渡された手書きの紙を、老眼鏡をかけた目で確認し、まずひとつのスイッチを入れた。

装置が声を発した。それは人間性に乏しい合成音であった。

『登録。登録サレマス。登録終了後、解錠装置ハ自動的二作動イタシマス。解消ハデキマセン。繰リカエシマス、登録後、解消ハデキマセン。デハ、プザーニヨル合図ガアリマシタラ、登録ヲシテクダサイ』

「どうぞ、お願いします」

老人は、たったそれだけのことで荒くなった息を受話器に吹きこんだ。

ニューヨークの音楽家は、小さなカセットレコーダーにテープを装着し、スピーカーを受

話器に押しあてた。

ブザーが鳴った。

老人が見守る中で、レベルメーターの針がふれ始めた。

メロディは簡潔で美しいものだった。

英語の歌詞には一番と二番があり、ミュージシャンは二番の最後の一行を数度リフレインさせて、曲を終えていた。

曲が終わり、レベルメーターの針が動きを止めると、老人はピックアップを受話器から外はずした。

老人はスイッチを切った。

『登録終了、登録終了。解錠装置ハ作動シマス』

コンピューターがいった。

「ありがとう、ありがとう、ミスター……」

「J・Lと呼んで下さい、サー。皆、私に愛着を感じてくれた人々はそう呼んでくれます。妻も、子も、そしてファンの人達も」

最後のひとことを、彼は誇らしげにいった。

「ありがたい、J・L。二週間後、大拝殿の落成式には是非、来ていただきたい」

「かならず、かならずうかがいます、サー。そして、この曲はできるだけ早く、信頼できる友人に託して、日本に送ります。送り先は、先ほど教えていただいたところですね」

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。